

人生を拓く

15

吉岡 秀雄さん (94) Ⅱ 3区

「昼は開墾して夜は炭焼き。昔の人は寝る間もないほど稼いだ』『お前らは遊んでるようなもんだ』って言われたもんだよね。でもわれわれから見ると、その時代はみんながそうだったからやれたんだと思うよね」。

祖父・幾太郎さん(昭和9年、65歳で逝去)からよく言われていたことを思い出します。

東旭川との境界沿いの山裾から倉沼川にかけて、1896(明治29)年に一族で入植しました。父・甚六さん(昭和59年、91歳で逝去)はデンマーク方式の理想の農業を追求し、家畜を飼い、酪農と水田の複合農業を実践しました。

「じいさんは馬が好きで、種馬育てたりして大事にしていたらしいさ。『馬つなぎの木』と呼んでいたヤチダモの大木は、入り口すぐの真ん中に今もしっかりと根付いている古岡家の語り部。

「一人前の農家の理想は『田んぼを作るのと家畜を育てるのが使命だ』と親父が言ってたよ」。父・甚六



さんは、自分でたい肥を作り町のたい肥共励会で優勝したことも。乳牛4頭を飼育し、「搾乳缶に毎日1本(25リットル程度)絞ったよね。自転車で毎日出したもんだ。途中で転んでひっくり返ったことあったね」「ホームパン作ると言っつてめん羊も飼っていた。町でも随分と講習会をして薦めとったね」と懐かしい思い出が次々浮かびます。

「この辺じゃあ珍しい大きな家だった。子どものころ座敷に入ったことなかったよね」という家は、1928(昭和3)年、小学1年の時に火事で焼失し、今残っているのは金張りの仏壇とお寺の過去帳。

今も2・5畝を作付け生産する現役米作り農家。町内で初めてハウス野菜の栽培を手掛け、ピーマン生産を広めました。コマと同程度の生産高になった時期も。しかし妻のサカエさんは75歳で先立ち「ずいぶん無理を重ねた」という思いがある様子。野菜生産は高収益の半面、早朝から深夜まで休む間もなく働き詰めでした。

「中風になってね、8年間も介抱したよね」。苦勞を掛け続けた当時を思い返ししました。阿波団体生産組合長(昭和44―同63年)などを歴任。町優良米生産農家(6回)。

俳句

明日無きを知りて散りゆくほーぼたる
雲の峰母に伝えて元氣だと
おすそ分けしたい幸せうつぎ咲く
老母の白髪美しき髪洗う
髪洗う若くはないと独り言
手のひらに夢叶えてと螢の日
父の日やコーヒーミルが歌い出す
ありし日のかみの田に飛ぶ蜜かな
ほうたるやひとりふたりの夕餉の灯
初螢暮れねばならぬ夜の樹々
胡瓜もみ季節の妙味に生かされて
螢狩り数十年ぶりのエスコート
チエーンソーの音はるかなり夏の午後
洗い髪夜風に吹かれ淡き恋
いつだって少女になれる名はデイジー
寝た母を七日に一度髪洗う
網戸して外の真夜中取り入れる
初螢逢う約束の日の近し

石澤清宏
松山蓉子
三島智
若田郁
本田咲
佐々木りえ
山内みゆ
長谷川きみゑ
小林ろば
高橋公花
杉山ひろのり
保科なほ
徳光吐苦
杉山りつ
こばやし 星来
横田則子
若田久
高瀬潤

